

不登校から大学進学までの心理的プロセスに関する事例研究

— 「不登校に関する実態調査」における報告事例の位置 —

岡田 敦史¹⁾、小川 香奈²⁾、寺田 道夫¹⁾

1) 東海学院大学 人間関係学部 心理学科

2) 岐阜県スクール相談員

I. はじめに

2014年8月に発表された文部科学省学校基本調査によると、2013年度の不登校の小中学生は11万9,617人(前年度比6,928人増)であり全生徒に占める割合は1.17%であった。近年は減少傾向であったが、6年ぶりの増加となった(図1)。小中学校における不登校についての研究は、不登校の分類(小泉,1973)不登校に至った経過(吉村,1988)、不登校への支援(中川・森井・鶴田,1997)、不登校後の進路(森田,2003、村田・三浦,2000)などがある。これらに比べ不登校から大学進学へ至った事例検討を行った研究は少ない。不登校の経験後どのようなプロセスを経て大学進学へ至ったのか。大学進学へ至るまでの心理的プロセスはどのようなものであったのか事例から検討する意義は大きい。そこで、不登校経験から大学進学へ至った過程についてインタビューを行い、その語りから事例を詳細に検討することにより心理的プロセスを明らかにすることができると思われる。

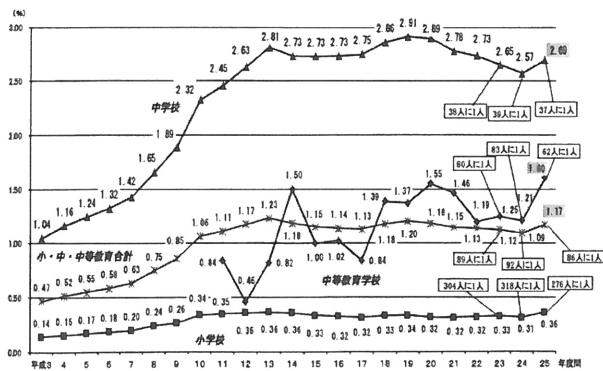


図1 「不登校」を理由とする者の全児童生徒数に占める割合の推移 (文部科学省, 2014)

一方、文部科学省不登校生徒に関する追跡調査研究班(以下、「研究班」と略す。)は大規模な実態調査を実施し「不登校に関する実態調査—平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書—」(2014)(以下「2014年実態調査報告書」と略す。)を公表している。報告書では、

次の考察がされているので引用する。「就学状況としては、「大学」に就学している者の比率が最も多く、次いで「専修学校(専門学校)・各種学校」となっている。(略)前回調査(平成13年度報告書)との比較において、特筆できることとして、現在何らかの学校に就学していると回答した者が23.0%から46.7%と大幅に増加していることである。とりわけ、「大学」については、6.6%から19.0%と約3倍に増加している。その他の項目についても、前回調査と比較が可能な項目については、全ての項目で就学状況に増加傾向がみられる。(略)不登校を経験した生徒の大学への進学傾向は確実に強まっている。このことは、高等学校等だけでなく、大学等においても不登校を経験した生徒の受入れ体制が整備されてきたことを示していると考えられる。」

本研究では、「2014年実態調査報告書」と本事例報告と対照し、不登校全体における本事例の位置づけを検討する。そこから、不登校全体の中で大学進学に至る経過に関して、不登校経験者の心理的側面のプロセスの把握を試みる。

II. 目的

本研究は第一に大学に進学した不登校経験者からの聞き取り調査を行い、不登校の始まりから大学進学までの経過について事例を報告する。第二に報告した事例を「2014年実態調査報告書」の集計結果と照らし合わせ、実態調査のどこに位置づけられるか検討する。最後に、不登校から大学進学への心理的プロセスについて事例に基づき考察することを目的とする。

III. 方法

1. 事例報告

(1)インタビュー協力者(以下、「協力者」と略する。)

大学に在学中の大学生380名に不登校に関する質問紙による調査協力を依頼し、回収された363名(男性153名、女性210名、平均年齢:20.5歳 SD=3.1)のうち不登校経験が有ると回答した者は59名(男性19名、女性40名、平均年齢:20.6歳 SD=1.1)であった。そのうち、インタビュー調査に協力してくれた者4

名（男性1名、女性3名、平均年齢:22.5歳 SD=2.3）のうち1事例を検討する。

(2) 手続き

インタビュー調査にあたっての倫理的配慮として、研究調査への協力は強制ではないことを伝え書面にて同意の記入を求めた。インタビュー中でも辞退したい場合は、いつでも辞退することが可能であることを伝えた。またその場合、録音したデータはすぐに廃棄することも伝えた。なお、以下の事例記述にあたっては個人が特定されないよう配慮してある。また、事例の公表にあたり事前に原稿を読んでもらい本人からの了承を得ている。

(3) インタビューの実施と分析対象

調査時期は、2013年X月～2013年X+3月であり、半構造化面接法によりインタビューを実施した。インタビュー時間は約30分であった。インタビューはICレコーダーに録音し協力者の語りについて正確に逐語記録を作成しこれを分析の対象とした。

(4) インタビューの構造（質問項目）

①不登校の発生から現在に至るまでの過程。②学校に行けなくなった原因や出来事。③再登校しようと思ったきっかけ。④現在の自分にとっての不登校の意味。①から④の項目についてインタビューを行ったが、協力者の語りにより自由に語ってもらうことを原則とした。

2. 「2014年実態調査報告書」について

研究班による「2014年実態調査報告書」は、不登校当時の状況、心境、必要とした支援や現在の状況、心境、必要とした支援などの追跡調査を行った結果の報告である。母集団は、平成18年度に公立中学校第3学年に在籍していた生徒のうち、不登校として年間30日以上欠席していた者であり、調査対象者（男子20,464人、女子20,579人、合計41,043人）である。全調査対象者41,043人のうち、アンケート調査は1,604人の回答を分析したものである。アンケート調査は平成24年1月～3月に郵送調査によって行われた。

IV. 結果

結果については、第一にインタビューの内容を事例報告として述べる。第二に「2014年実態調査報告書」と本事例との照らし合わせを行い、該当部分の比率を記載する。

1. 事例報告

協力者：A（女性、インタビュー時20歳代前半）

中学1年生のとき不登校となり、中学生時に2年間と高校進学後も1年半の不登校期間がある。①～⑤は質問であり、「」内はAの発言である。

①不登校の発生から現在に至るまで

「中1の1月から週5日のうちに2・3回休むようになって、早退も多くて、2月、3月と回数が増えていき、3月には全く行っていない。中2は1年間行かず。中3は適応指導教室で過ごした。高校は行かなくちゃいけないと思っていた。偶然にも推薦が貰えたので、とりあえず進学はした。長く不登校だったのですぐに復帰も出来ずに結局別室登校だった。単位が足りなく留年を選択した。もう1回1年生をやり始めたが、それでも復帰できなかった。夏休みに校長先生に親と一緒に呼ばれて、「最後の選択です」って言われ、2回留年はさせられないから退学か、ちゃんと来るか選択するようにと言われた。それでも迷っていたら、父に「お前いい加減にしろ」って言われた。退学したら働かなくてはいけない。絶対働けないし留年も出来ない。かと言って別の学校に行くというのも嫌で、「それじゃあ行けばいいのね!？」って感じでほぼ崖っぷちの選択で戻った。とりあえず夏休み期間中の補習を受けなさいという事で、それに始まり、夏休み明けの2学期からはちゃんと行きはじめた。ちよくちよく遅刻とかはしていたが…。高1の時点では8月まで休んでいたんで成績も適当で散々、だから授業もついて行けなかったんで補習を受けた。そしたら補習の課題で皆がやっているよりも進んでしまった。それで「これで追いつける!」と思って授業に行った。教室では皆の方が遅れている状況になっていた。皆より進んでいる。だから授業も楽でその辺から全然休まなくなった。高2からは勉強に目覚めた。特に数学とかは、(以前は)授業受けてなくてテストとかは保健室で受けて0点だったけれど、2学期の始めのテストは80点台でクラストップになっていた。大学は普通に受験した。高校から指定校推薦を受けると言われたけれど、面接は絶対嫌だ!と断った。だから最初は遠方に行こうとしていたけれど、結局近隣の大学に通う事にした。大学に入ってから結構今でも早起するのは苦手で遅刻は多い。途中で行くのを辞めて単位を落とした事もあった。」

②学校にいけなくなった原因や出来事

「中学校の時の学校に行けなくなったきっかけは、成績落ちたからと親に言われているけれど、それは重要じゃない気がする。もっと重要なのは「母との依存」。親が働いていて、私が生まれた時は育休が1年しか貰えなくて、だから私が0歳児の時に保育園に入れられていた。朝一番に送られるくせに帰りは居残り組で夜7時とかに…そういう感じだったので…親が言うには休みの日は遊びに連れて行ったりしていたと言うが、記憶としてあまりない。お母さんと一緒に居た記憶もあまり無い。

あと小学校低学年の時に兄弟が生まれつきの病気が原因で入退院を繰り返して手術もしていたので、母は病院に泊まりつきりだった。母と一緒に居た記憶が…体験的に少ない。成績が落ちたというのは覚えてない。親が休職して、そこで親と一緒に居れる！と思ったから休んだのかもしれない。高校の時は行かない事に慣れたからだと思う。環境が変わったから行こうと思えば行けたと思うけれど、その辺は多分怠けも入っていると思う。行かなくていいやって気持ちがあった。」

③再登校と大学進学のかっけは。

「きっかけは、多分行けて言われて“マズイ”って思っ行ってたぐらい。結構背中を押されたと思う。それが1番だと思う。多分登校刺激をするな！と言うブームの時期で母親としては放っておけ（本人の）思うように少しづつでいいからって言う意見があって、父親を押さえていた。けれど父親がこの辺で爆発して『お前には任せられん、いいから行け！』って言われた感じだった。今思えば父親らしい父親だった。あんまり言わないようにしていたらいい。だから中学校時代はそれでよかったと思うが、高校時はもう戻る元気はあったと思う。怠けの方だと思う。だからタイミング的にはバッチリだったと思う。後押しと言うか責められたって感じだった。」

④現在の自分にとっての不登校の意味または、当時の自分と今の自分との違い

「大分違うと思う。考え方も外に出ている。引っ張って行くようになったと思う。1番は考え方。ポジティブになった。不登校当時は、後ろ向きにしか考えられなかつ

たと思う。何を考えても後ろ向きみたいな感じだった。その後、自信が付いたからだと思う。乗り切ったと思っしたのは高校時代。過去に、なったなあと思う。」

⑤その他（インタビューへの感想など）

「感想…久しぶりに振り返ったなあという感じがする。」

2. 2014年実態調査報告書のデータと本事例との照らし合わせ結果

2014年7月に公表された「2014年実態調査報告書」の中で本事例と照らし合わせを行い、本事例の比率を抜き出してみると以下のものである。表1には一覧表で示す。最初に学校を休み始めた学年と時期「中学1年1月～3月、3.65%」。中学校2年生時はどのくらい学校を休んだか「ほとんど休んだ、44.7%」。中学校3年生の時はどのくらい学校を休んだか「ほとんど休んだ、61.3%」。不登校のかっけとして「親との関係、14.4%」。中学3年の時利用した場所「適応指導教室、20.2%」。高校に進学した87.7%のうち「中学卒業時希望通りの進路に進むことができた、44.7%」。中学校を卒業してから現在までをふりかえって、進学した学校についてどのような感想を持っているか「勉強を通して自分に対する自信ができた、46.5%」。調査時の通学先として「大学19.5%」の結果が報告されている。

表1 不登校に関する実態調査—平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書—

文部科学省不登校生徒に関する追跡調査研究班（2014）

平成18年度に公立中学校第3学年に在籍していた生徒のうち、不登校として年間30日以上欠席していた者(母集団) 調査対象者(男子20,464人、女子20,579人、合計41,043人)

全調査対象者41,043人のうち、アンケート調査は1,604人

アンケート調査時期平成24年1月～3月

Aの経過との突き合わせ結果

項目	選択肢	比率
中学校2年生時不登校状況	ほとんど休んだ	44.7%
中学校3年生時不登校状況	ほとんど休んだ	61.3%
不登校のかっけ	親との関係	14.4%
最初に学校を休み始めた学年と時期	中学1年 1月～3月	3.65%
中学3年の時利用したり相談した場所	適応指導教室	20.2%
高校進学した		87.7%
中学卒業時、希望通りの進路に進むことができたか	希望どおりだった。	44.7%
中学校を卒業してから現在までをふりかえって、進学した学校についてどのような感想を持っているか。	勉強を通して、自分に対する自信ができた	46.5%
調査時の通学先	大学	19.5%

V. 考察

1. 不登校から大学進学までのAの心理的成長の過程について

Aの事例について、語られた内容から心理的成長過程を検討する。不登校期間は、中学1年の3学期から卒業までの2年3月、および高校1年留年後の夏休み明けまでの1年5月の合計3年8月におよぶ長期間である。しかし、中学3年は適応指導教室へ通い、高校留年中の夏休みは補習で通学をしている。いわゆる普通登校ができなかったのは2年半程度となる。この期間の家庭での生活の様子や専門機関への相談については語られていない。不登校のきっかけと言える原因や出来事については、保護者らの認識と本人自身が現在回想する理由とは異なっていることが特徴である。外部からみると「成績の低下」という理由となるが、成績の低下は不登校以前から学習・登校意欲の低下の結果であったかもしれない。学習や登校意欲の低下が不登校の始まる前に先行していたとも推測できる。本当の理由について、A自身は端的に「母への依存」と語っている。保育園時代も早朝から夕方遅くまで登園し、忙しく働く母親を思いやりながら、孤独感を感じながらも頑張っていた経験があったのだろう。小学校低学年時代のエピソードも想起される。ここでも、兄弟の看病で夜も帰れない母の苦勞を感じながらもA自身の寂しさ、孤独感を耐えていた健気なAの姿が想像される。我がままを言って母へ依存し(甘え)たくてもできない状況に耐えてきたのだろう。「がまん」や孤独感を抱えながらも中学1年2学期までは何とか「頑張っていた」のかも知れない。幼い頃から抱えてきた健気な「がんばり」が遂に続かなくなり不登校となったのであろうか。A自身は意図したものではなかったが、奇しくも親が休職して自宅で過ごすことになった。このことで中学2年時は「依存(甘え)のやり直し」ができた。そのため中学3年時は適応指導教室へ通学も可能となったのであろうか。高校進学はなんとかできた。しかし、Aの心理的成長という観点では十分でなかったため留年し再度1年生のやり直しが必要であったのであろう。適応指導教室への登校や留年という選択は、Aの心理的成長の機が熟すまでのモラトリアム期間として大切なことであったと推測される。このことは、当時A自身が独力でできる「適応的行動の選択」とも言える。そして、これもA自身が語る「タイミングばっちり、父親らしい父親」の登場と「いい加減にしろ」の一言は大変重要な転機となった。まさに、時節にあった「適切な一言」を、「適切な人物(父)」から言われたことでA自身の心理的成長を後押しするものだった。その後の補習、

2学期にはクラスの学習を追い越していたこと、学校からの推薦を断って自力で大学受験をするまでは、A自身が本来持っていた力が順調に発現された結果からの経過である。大学生になっても遅刻が原因で単位取得ができないことも、Aの遅さの現れとして印象的な語りである。

2. 「2014年実態調査報告書」との照らし合わせからの考察

不登校のきっかけ出来事について、周囲と本人の意識と「ずれ」が生じているが、「2014年実態調査報告書」でも「親との関係」を挙げている者が14.4%いることが興味深い。不登校と云うと学校への集団不適応や友人との対人関係の問題が目につきやすいが、Aも語るように「保護者との関係の在り方」が、登校という社会活動を支える重要な心理的環境でもある。不登校について「保護者との関係の在り方」を考えることの重要性を示唆している。次に、不登校後の重要な支援としての「適応指導教室」利用について、「2014年実態調査報告書」でも20.2%の利用がある。Aの場合も重要なモラトリアム期間であることから、不登校経験者の居場所としての支援の重要性が示されている。

不登校経験者の大学進学率が19.9%である。Aはこの中の一事例であることになる。Aは一年留年後、補習で学習への意欲を回復することが転機の重要な要因である。「2014年実態調査報告書」でも同様に「勉強を通して、自分に対する自信がでてきた46.5%」と不登校経験者にとって学力の向上は重要な要因であることが示されている。学力の維持や向上は、不登校経験者の進路形成の上でも重要な支援要因であると言える。

VI. まとめと今後の課題

本研究は、不登校経験者の大学進学までの心理的プロセスを事例を通じて検討することであった。また、文部科学省が発表した「2014年実態調査報告書」の中で本事例の位置づけをデータと照らし合わせを行うことで検討した。「2014年実態調査報告書」には、大学進学に関して図2のような多様な経路が報告されている。このような多様性が重要であり、多様な経路を通じて大学や専門学校への進学と職業キャリアの形成も可能である。今後は、多様な経路を経て大学進学へ結びついた事例も含めて検討することが必要であろう。小川(2014)は、複線経路・等至モデル(TEM)を用いて複数事例を検討しており、今後はこのような心理学的質的研究法を用いて検討し、不登校から大学進学への心理的プロセスを明らかにすることが重要となる。

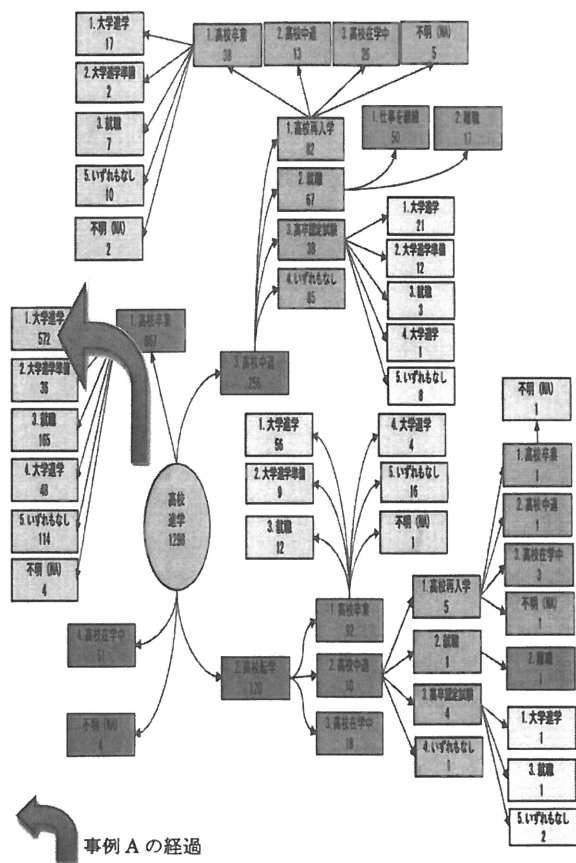


図2 「2014年実態調査報告書」から

付記

論文作成にあたり、Aさんからは発表の許可と本研究への感想を事前に寄せていただきました。Aさんにこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

引用文献

小泉英二 (1973). 登校拒否—その心理と治療 学事出版.
 文部科学省不登校生徒に関する追跡調査研究班 (2014). 不登校に関する実態調査—平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書—.
 森田洋司 (2003). 不登校—その後 教育開発研究所.
 村田昌俊・三浦務・武田公孝・林耕司・朝倉明美・伊藤健治・郡司竜平 (2000). 不登校学級卒業生のその後 情緒障害教育研究紀要, 19, 61-68.
 中川厚子・森井ひろみ・鶴田桜子 (1997). 適応指導教室の機能に関する研究—中学卒業生のフォローアップ— カウンセリング研究, 30(3), 255-265.
 小川香奈 (2014). 不登校経験者が不登校状態を克服し大学進学するまでの心理的プロセスに関する研究 東海学院大学人間関係学研究科 修士論文.
 吉村英雄 (1988). 登校拒否の進展モデル 教育心理, 7, 日本文化科学社.